

希望学の広がり

2005年

4月、東京大学社会科学研究所の全所的プロジェクト「希望の社会科学研究（希望学）」はじまる
7月、初のシンポジウム「希望学宣言！」開催

2006年

4月、岩手県釜石市で実地調査を開始。自然災害、戦争、不況などの試練をどのように乗り越え、どんな希望を見出すのか、聞き取り調査やデータ解析を進める

2008年

10月、国際会議「法と経済における希望」開催（米・コーネル大学と共催）
11月、「福井の希望を考えるフォーラム」開催（福井県と共催）

2009年

3月、全所的プロジェクト「希望の社会科学研究（希望学）」終了。研究成果『希望学』（全4巻／東京大学出版会）を刊行
4月、グループ共同研究として福井県で地域調査を開始（2012年12月まで）

2010年

11月、地域の希望と個人の希望の接点を探るため、「福井市内高校卒業後の地域移動調査」を開始（2013年6月まで）

2011年

4月、釜石市を訪問。9月、東日本大震災の体験者・当事者にインタビュー調査を開始（2014年10月まで）
7月と12月、「ふくいの希望を考えるフォーラム」開催（福井県と共催）

2013年

10月、福井県の調査地域で中学生を対象に「希望学講座」を開講（全11回、2015年11月まで）

2016年

4月、希望学の研究成果を生かした、東京大学社会科学研究所の新たな全所的プロジェクト「危機対応学」がスタート

2017年

8月、危機対応学として釜石市を中心とする三陸沿岸地域の現地調査実施

2018年

2月、東京大学大気海洋研究所と共同で「海と希望の学校 in 三陸」プロジェクト開始

希望の定義

希望とは、大切な何かを行動によって実現しようとする気持ち。
Hope is a wish for something to come true by action.



「気持ち(願い)」を持って「(大切な)何か」を「実現」しようとする「行動」。希望学では、希望がこの4つの柱から成り立っていると定義している。希望が叶うのをただ待つだけでなく、自ら行動することが希望を叶える第一歩になる

数字が語る希望

【出典】『希望学1 希望を語る-社会科学の新たな地平へ』第4章 データが語る日本の希望（玄田有史）
東大社研・玄田有史・宇野重規 編 東京大学出版会

「あなたには希望がありますか？」
n=2,010

希望がある 78.3%

その希望は

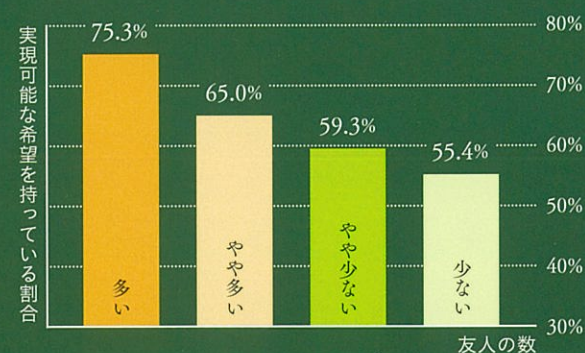
1) 実現できる	23.9%
2) たぶん実現できる	56.8%
3) あまり実現できそうにない	16.9%
4) 実現できそうもない	1.6%
5) 無回答	0.8%

いつ実現できますか？
(最も早い内容)

1年以内	16.8%
2～3年	31.7%
4～5年	23.8%
6～10年	21.6%
11年以上	6.1%

希望学で2006年におこなったアンケート調査では、回答者の約8割が何らかの希望をもち、その希望は将来実現可能と考えていた。バブル経済崩壊以後、閉塞感のつる現代でも多くの人が希望をもっていることがわかった

「友人の数と実現可能な希望の関係」 n=2,010



2006年のアンケート調査では、友人の数が多いと思っている人ほど実現可能な希望をもっていた。友人の存在が、希望をもつことと大きく関わっていることが示唆されている



岩手県釜石市で、住民にインタビューする筆者（左）。2006年から同市で希望学の調査をおこなっている

希望学 社会の中の 希望を探る

「希望学」は社会学、経済学、心理学など多角的な視点で社会と希望の関係を探る東京大学社会科学研究所の取り組みです。大学院生の頃からこの研究に参加している筆者が福井県でおこなったフィールドワークを軸に、希望が息づく社会の在り方を考察します。

佐藤由紀

Yuki Sato
リベラルアーツ学部教授

希

望学は、2005年4月から東京大学社会科学研究所の全域横断的なプロジェクトとして始動しました。そもそも、希望学は挫折から始まっています。労働経済学者である玄田有史教授が、科学技術研究費に応募したところ「希望は心理学が探ることだろう」とのコメントと共に不採択。そんなものか、と半ばあきらめていたところに、同研究所の日本経済史学者の中村尚史教授と政治学者の宇野重規教授が、社会科学者が希望を探るこ

とのなにかおかしい！これはやるべきプロジェクトだ！と、玄田教授を後押しして始まったと聞いています。私と希望学のかかわりは希望学スタートの2005年。私が大学院博士課程2年生、生感心理学という学問を背景に俳優の演技の分析をしていた頃からです。玄田教授が事務のアルバイトを探しているところ、友人から聞き、早速面接にいったところ、「大学院生？何してるの？……へえ、イッセー尾形の研究。飲み会の話題になりそうの研究。飲み会の話題になりそうの研究は希望学にぴったりだ」と、リサーチ・アシスタントとしての採用が決まったのです。飲み会の話題になりそうな研究をしている大学院生がリサーチ・アシスタントにぴったりな学問、希望学。しかしその内容は、学者としての生真面目さとユニークさを併せもつ、学問らしい学問です。

希望のかたち

希望学には3つの柱があります。まずは、希望とは何かをとことん考える思想研究、次にアンケートによる全国調査に基づくデータ重視の実証研究、そして岩手県釜石

市や福井県を対象とした包括的な地域調査です。そもそも、希望は個人の胸の内にあるもので、社会の希望なんてあるのか、そう思う方も多いと思います。胸にひっそり希望の火を灯し、前進する人生の一場面があることも事実です。一方で、希望が生まれやすい土壌や希望をもつことが出来る状況、そして、空間のないし時間的に共通の経験をした人びとの「間」に生まれる希望の経緯や意味合いを探る学問、それが希望学です。希望とは何か。それを真正面から問うた学者は今まで多くはいません。エルンスト・ブロッホというドイツの哲学者が、その名も『希望の原理』（1982年）という著を記したくらいです。ブロッホは希望について「未だないもの」という不思議な定義をしています。希望とは手に入れた時点で希望ではなくなるのです。希望は常に私たちの少し前、ないし遙か前をちらちらと揺れ動く光のようなものであり、幸福が「状態」を示す語であるとしたら、希

望は「変化」を示す語と言えらるでしょう。

ひと続きの空間と時間を共有している人たちのことを、私たちはその区切り方によって、家族とよんだり、仲間とよんだり、地域社会とよんだりします。東京の新興住宅地で育った私にとって、特に地域社会という言葉はとても縁遠いものでした。生まれ故郷というほど愛着もなく、その地域の会員と共同の活動の中からその地域が「つくられる」という実感をもてませんでした。地理上もしくは行政上のテリトリーにどうしてそこまでこだわったのか。まったくぴんときませんでした。

そんな私が、希望学にかかわって4年になる2008年に、リサーチ・アシスタントから特任研究員となり、研究者の卵としての一歩を踏み出すこととなりました。ちょうどその時、希望学で福井県を対象とした地域調査をおこなうことが決まったのです。

歴史をつなぐ人々

福井県は、47都道府県の中でも人口移動の少ない県です。福井はその土地を生き抜いた先人たちの

有形無形の知恵を受け継ぎ、積み上げる種がそこら中にある土地だ、とも言えます。

希望学では、福井県の前に2006年から4年間、岩手県釜石市で地域調査をおこなっていました。その結果、希望が生まれる土壌を耕すには、次の3つの要素が不可欠なのではないか、という仮説にたどり着きました。1つめは地域内外でのネットワーク形成をすること。2つめはローカル・アイデンティティ（以下、地域の個性）の再構築。3つめは希望の共有です。

私は、福井県での地域調査をおこなうにあたり、地域の個性の再構築に注目し、その地域に伝承される伝統芸能は地域の個性を形づくる役割を担っているのではないかと、という仮説をたて、岐阜県と進む池田町に飛び込みました。舞台芸術を対象に研究をすすめてきた私にとって、700有余年の歴史をもつと言われている池田町の伝統芸能「水海の田楽能舞」の身体的知の伝承方法を知りたい、という動機もありました。

「水海の田楽能舞」は田楽四番、能五番を半日がかりで舞う長丁場

の神事です。驚くべきことに、舞人、地謡方、囃子方など、総勢30余名すべてを地域の人びとで担っていました。奉納は2月15日。全体稽古開始から奉納までには約2週間の道のりがあります。2011年の冬、その継承の一部始終をつぶさに観察させてもらいました。

何よりも感嘆したのは、長老たちの軽やかさと粘り強さでした。彼らは700有余年という歴史の重みを十二分に受け止めつつも、伝統芸能の形をその時代に合うように変化させることを厭わず、十数年育ってきた若手の継承者たちが家庭や仕事の事情でいなくなっても、「この人なら」とまた若人をスカウトし、こつこつと育て上げていく。なぜ、そこまで？ という私の素朴すぎる問いに、「大事なことだから」と、当時の保存会長はためらいなく答えました。

自分の物語を紡ぐ

以前、希望学で希望を次のように定義しました。
Hope is a wish for something to come true by action.
つまり希望とは、「願（wish）」であり、それは「大切な」何か

(something)であり、「行動(action)」によって「実現できる(come true)」もののなのです。

「水海の田楽能舞」の伝承調査はまだ継続中です。わからないことばかりです。ただ、そこには、伝承という具体的な願いがあり、それは、長老たちのしなやかな精神力に支えられたスカウトという行動によって実現できるかもしれない願いでもあります。そしてその願いは、おそらく水海地区の希望へとつながるものです。ひよっとすると地域社会で生きるとは、そういう先人たちの様々な願いを引き受け、自身の人生に取り入れ、あちらこちらにぶつかりながら、その意味を考え、そこから自身の願いを見つけ、また後人へと語りこなすのではないのでしょうか。

希望学では、各人における物語性の必要を指摘しています。物語は、語るための種と言葉、そして他者が必要となります。言わば、自身を語ることで互いの物語に気づき、他者となることができるようになるのです。私たち一人ひとりが語る言葉をもつこと。それが社会の中に希望が生まれる第一歩なのかもしれません。

福井県 「水海の田楽能舞」

福井県池田町



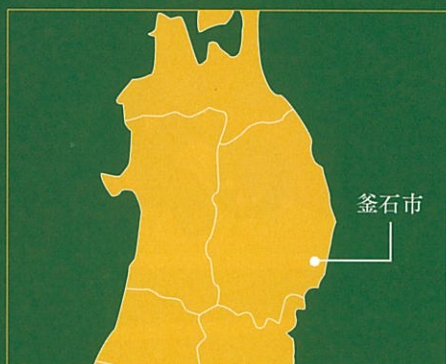
希望学が福井県で2009年から行っている地域調査で、筆者の研究対象は岐阜県との県境に位置する人口約2,600人の池田町。水海地区の鵜甘神社では、毎年2月15日に田楽能舞が奉納される。一部の舞人は世襲制だが、ほかには小学生から高齢者まで地域住民によって構成、伝承されている



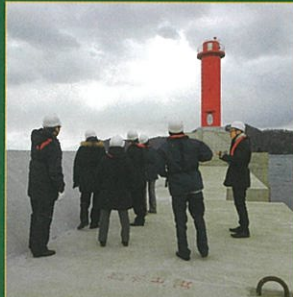
田楽能舞の練習風景。鎌倉時代、北条時頼が当地で越冬し、村人たちに能舞を伝えたのが始まりと言われる。1976年に国の重要無形民俗文化財の第1回の指定を受けた(上) 筆者が調査に訪れた2011年の田楽能舞。鵜甘神社の本殿に設えられた舞台を多くの観客が見守る(下)

岩手県 「社会における希望の変遷」

岩手県釜石市



岩手県、陸中海岸に面した釜石市。近代製鉄発祥の地として明治期から繁栄し1960年に最盛期を迎えるが、1896年と1933年の津波、1945年の艦砲射撃で壊滅的な被害を受けた苦難の歴史がある。希望学は何度も立ち上がってきた釜石市の歴史に着目し、2006年から地域調査をおこなっている



2017年の釜石市鵜住神社例大祭。東日本大震災では海岸から約2km離れた神社(右奥)の目前まで津波が到達し、3基の大鳥居が流出した(上) 再建間近の釜石港湾口防波堤を視察する研究者たち(2018年2月)。希望学では、住民らがどのように希望を共有し、地域の再生に取り組んでいるのかをアンケートやインタビューで調査している(下)

希望学の記録

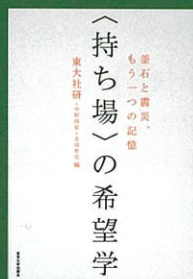
福井県と釜石市の調査は、それぞれ研究成果報告として書籍にまとめられた。いずれの地域も継続して調査中である。

【参考文献】

- ・ 玄田有史 (2009) 『希望学とは (2009)』 東京大学社会科学研究所 『希望学』 ホームページ (2018年1月14日取得、http://project.iss.u-tokyo.ac.jp/hope/hopology/2016/_2009_1.html)
- ・ 総務省統計局 『平成22年国勢調査結果』 (2018年1月14日取得、<http://www.stat.go.jp/data/kokusei/2010/idou1/pdf/gaiyou.pdf>)
- ・ 園田恭一 『現代コミュニティ論』 東京大学出版会 (1978)
- ・ 東大社研・玄田有史・宇野重規 編 『希望学1 希望を語る』 東京大学出版会 (2009)
- ・ 東大社研・玄田有史・中村尚史 編 『希望学2 希望の再生』 東京大学出版会 (2009)
- ・ 東大社研・玄田有史 編 『希望学 あしたの向こうに 希望の福井、福井の希望』 東京大学出版会 (2013)
- ・ 東大社研・中村尚史・玄田有史 編 『〈持ち場〉の希望学 釜石と震災、もう一つの記憶』 東京大学出版会 (2014)
- ・ エルンスト・ブロッホ 『希望の原理 第一巻』 白水社 (1982)



『希望学 あしたの向こうに 希望の福井、福井の希望』 東大社研 玄田有史 編 東京大学出版会 (2013年7月)



『〈持ち場〉の希望学 釜石と震災、もう一つの記憶』 東大社研 中村尚史・玄田有史 編 東京大学出版会 (2014年12月)